

Ⅳ-269 人間発達の観点からみた高速道路と沿道施設の役割と今後のあり方に関する一考察

西日本旅客鉄道 正員 近藤政弘
 大阪大学工学部 正員 新田次次
 大林組 正員 灰谷篤雄
 本四公団 正員 前川昌弘

1. 研究の背景と目的

これまでの高速道路整備は地域の経済的発展を目指すことに主眼がおかれ、地域の人たちの成長・向上に貢献したかという観点(人間発達の観点)でのとらえ方は弱い。人間発達を促す観点から高速道路整備を考えると、高速道路を人と人を結びつける文化交流の装置と考え、沿道の文化・教育・レクリエーション施設などの人間発達型施設整備と一体的に計画する視点が重要となってくると思われる。そこで本研究では、中国自動車道路の整備とあわせて、沿道に文化的な施設を先行的に整備した兵庫県や沿道自治体などによる「緑の回廊」施設をケーススタディとして選び、また沿道際の施設であるサービスの新しい活用もとりあげ、これらの施設に対する沿道住民の評価から、今後の高速道路整備と沿道での施設整備について知見を得ることを目的とした。

2. 沿道住民の意識調査

人間発達型の沿道施設が整備された中国道沿道地域の中で、東播磨内陸地域の加西市、滝野町、社町を選び、この3市町から中国道、沿道施設へのアクセスが異なる4つの小学校区をとりあげた(調査地域を図1に示す)。小学校でアンケート配布を行い、児童を通じて保護者に回答してもらった結果、有効回収数は1698票、有効回収率は80.0%となった。調査対象とした主な「緑の回廊」施設を表1に示すが、おおまかに知名(認知)度、利用度とも広域なレクリエーション施設(広域利用型)、知名度は高いが利用度がやや狭域な文化・教育施設(広域認知型)、知名度・利用度ともに狭域な施設(狭域利用型)に分けられる。

3. 沿道住民による高速道路に対する評価の分析

中国道の総合的な評価について、＜地域の発展＞＜くらしの向上＞それぞれにとって役立っているかどうかたずねた。図2に示すように地域にとって役立っていると評価している住民(①・②)は8割近くいるが、自分のくらしに対して役立っているとする住民(①・③)は5割弱と、地域に対する評価と比べると低い。また、くらしに対する中国道の評価要因分析として、生活の利便性、地区分断・交通公害などの環境、また文化面での中国道による変化16項目を説明変数としてとりあげ、数量化Ⅱ類分析を行った結果、表2(ここでは偏相関係数0.1以上のもの)に示すように、大都市へ出ることによる文化接触、大都市との文化交流の増加の変化が、この評価に大きく寄与していることがわかった。

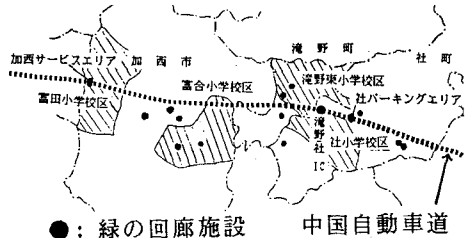


図1. 調査対象地域(調査票を配布した小学校区)

表1. 調査対象地区の「緑の回廊」施設

	利用度	
	狭域	広域
知名度	<狭域利用型施設> ・加西勤労者体育センター ・加西市健康増進センター ・社マターボート会館 ・滝野歴史民俗資料館 ・山陽自然歩道	
		<広域認知型施設> ・兵庫教育大学 ・瀬野台生涯教育センター
利用度		<広域利用型施設> ・いこいの村はりま ・フラワースセンター ・増穂中央公園

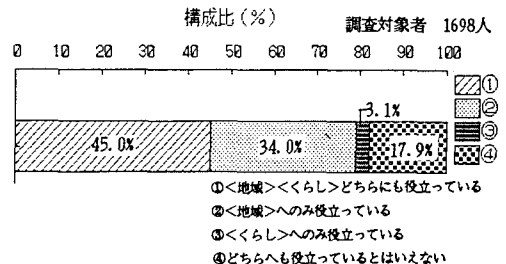


図-2. 中国自動車道路の評価(地域、くらしにとって役立っているかどうか)

